

小さなねじ

小川未明

青空文庫

おじいさんは、朝起きると、火鉢に当たりながら、もうそのころ配達されている新聞をごろんになっています。これは、毎

朝のことでありました。

今日も、早く起きて火鉢の前にすわっていられました。外ではうぐいすの声がしていました。

「だいぶ春らしくなつたな。この分では、もうじきに桜の花が咲くだろう。」と、独り言をしながら、眼鏡をかけ直して、新聞をひろげていられました。おじいさんは、お年のせいで、眼鏡がなくて、すこしも新聞がお読めになれないのでありました。そのうちに、おじいさんは、急にあわてて、眼鏡をはずして、手

であたりをなでまわしながら、なにかさがしていられました。

「おじいさん、どうなさったのですか？」と、正しょうじ二のお母かあさんが、これを見て、おききなさいました。

「いや、眼鏡めがねのねじが、どこへかとんでしまつてな。」と、おじいさんは、おつしやいました。

「ありませんか。」と、お母かあさんは、すぐにそばへきて、いつしよになつて、探さがしなさいました。

「なにしろ、小ちいさいものだから、ちよつとわからないだろう。」と、おじいさんは、片かたほう方のつるがはずれて、かけられなくなつた眼鏡めがねを持ちながら、困こまつた顔かおつきをしていられました。

「どうして、とびましたでしょうね。」

「こうして、毎日、幾度となくかけたり、はずしたりするからゆるんだにちがいない。いまに正坊が起きてきたら、さがしてももらいましょう。」と、おじいさんは、それまで新聞を見ることがあきらめなさいました。お母さんも、しばらく、火鉢のまわりや、畳のすきまなどを見てさがしていられましたが、とうとう見つかりませんでした。

「火鉢の中へ落ちたのではないでしようか？」

「いや、火鉢の中へは入らないと思うよ。ころころとところがつた音がしたから。」と、おじいさんは、また身のまわりをおさがしになっっていました。

「正ちゃん、早くいらつしやい。」と、お母さんは、顔を洗って

いた、正二くんをお呼びになりました。正二くんは、家内じゆうでいちばんだれよりも目がよかつたからです。正二くんは、さつそくきました。

「どうしたの。」

「おじいさんの眼鏡のねじが、どこかへとんだから、よく探しておあげなさい。」と、お母さんが、いわれました。

「どんなねじなの、おじいさん。」

正二くんは、おじいさんの持つていられた眼鏡を自分の手に受け取って、片方についているねじを見ました。それは、小さな、平らかな頭に溝のついていました。

「白く、光っているのだね、じゃ、わかるだろう。」

それから、正二しょうじくんは、熱心ねっしんにへやのすみずみまでさがしたのでありました。しかし、やはり見みつかりませんでした。

「どこへいったろう。おかしいな。」と、正二しょうじくんは、いくら探さがしても見みつからないねじを不思議ふしぎがりました。

「これほど探さがしてもなければいい。」と、おじいさんは、いわれました。

「ほんとうに、おかしいですね。とんだものなら、どこかにありそうなものなのですの。」と、お母かあさんが、いわれました。

「ないはずはないんだがな。」と、正二しょうじくんも、だいぶさがしあぐんだ形かたちです。

「こんな小ちいさなねじでも、ないと眼鏡めがねが役やくにたたぬ。使つかっている

ものは、平常へいぜいそんなことを考えぬが。」と、おじいさんは、笑わらわれました。

「ねじ一つの力ちからも、大きいものでございますね。」

「ほんとうに、そうだよ。」

「たいていは、眼鏡めがねの玉たまや、縁ふちにばかり気きを取とられて、気きのつかないねじのことなどを考えるかんがものはありませんが……。」と、お母かあさんが、いわれました。

「だから、こうして、ときどきなくなると、その必要ひつようがわかって、いいことかもしれぬ。」

「おじいさん、ねじは、どこかへ入はいって、みんなが自分じぶんをさがして、大騒おおさわぎをしているのを見みて笑わらっているでしょうね。」と、

正二くんが、いいました。

「ははは、そうかもしれない。」と、おじいさんが、お笑いになりました。

「ねじ、ねじ、見つかれよ。」と、正二くんはまた、さがして
 いました。もし、このとき、ねじが見つかったら、みんなは、ど
 んなにか喜んだでしょう。そして、この後、そのねじをたいせつ
 にしたでしよう。しかし、ねじは、あくまですねて、どこかに隠
 れて、姿を見せませんでした。おじいさんは、支度をなさって、
 眼鏡屋へいかれました。ちようどまにあうねじがあつてくれれば
 いいかと、思っています。ところが、眼鏡屋の職人は、

「ああ、ねじがはずれたのですか、ゆるむとよくとれましてね。」
 といつて、たくさんねじの入りはい入っている箱はこを持ち出もしてきました。
 そして、造作ぞうさなく一つをピンセットで摘つまみ上げると、眼鏡めがねの穴あなに
 はめて、ねじまわしで、くるくるとまわしました。それから、つ
 るの上げ下ろし具ぐ合あをよくしらべてから、

「はい、これでいかがですか。」といつて、差し出さしました。

「おお、もう直なおりましたか。」と、おじいさんはこんなほんにすぐ直なお
 るものなら、あんなにさがすことはなかつた。また晩ばんから新聞しんぶん
 が不自由ふじゆうなく読よめると思おもい、それを楽たのしみながら、家いえへ帰かえられた
 のであります。

翌よくじつ日、おそうじのときに、お母かあさんは、ほこりにまじつて、

ごみ取りのうちに光ひかったものを見つけました。よく見ると、それは、みんなで大騒おおさわぎをしてさがした、おじいさんの眼鏡めがねのねじでありました。

「おじいさん。ねじがありましたよ。」と、お母かあさんが、いわれ
ると、

「いまごろ、出でてきても、もうそんなものはいらなから、捨すてておしまいなさい。」と、おじいさんは、答こたえられました。まっ
たく、使つかい途みちのないものは、ほこりと同おなじであるから、あるとき
は、大だい事じがられたねじも、ほこりといっしょにどこへかはき捨すて
られてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1941（昭和16）年6月6日、7日

※表題は底本では、「小《ちい》さなねじ」となっています。

※初出時の表題は「小さなネヂ」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さなねじ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>